

視点・論点・ところてん

体育の授業、学年でどう共同する？

ある会員の人が、小学校1年生で跳び箱の授業をするということなので、「みんなが輝く体育」シリーズの低学年にある内容を紹介した。

しばらくたって、その人から授業の様子を聞くと大変なできごとが起こっていた。

学年で「跳び箱の授業をする」と決め、その会員の方は「輝くシリーズ」の内容を参考にゆっくり授業を進めようとしたのだが、「例年、最後は合同で発表会をしている」と同僚から告げられ、授業の進め方を変更せざるを得なくなった。そんな矢先である。

2回目の跳び箱の授業で、男子児童が左肘を開放骨折しました。全治5ヶ月です。1回目の授業では、両足踏み切り、跳び越し乗り、着地の練習を行いました。その後、学年で話し合い、多くの児童が跳び箱を跳べるようにという目標に向けて、合同体育で跳び箱の指導を行うことになりました。合同体育では、初級、中級（三段、四段）、上級（五段、六段）に分かれて練習を行っていました。始めの「自分の跳べそうなところに並んでね。」の声かけによって、いきなり上級から始める児童が多く、進めていく中で、何人かが手を捻ったり、足首を痛めたりしていました。それでも指導を続けた結果、六段を飛んでいた男子児童が骨折をしてしまったのです。

その児童は、1度目は跳び箱の上に座る形になり、2度目は上手く跳び越えたのですが、3度目で、勢いよく跳び越えてしまい、手から着地をして骨折をしました。

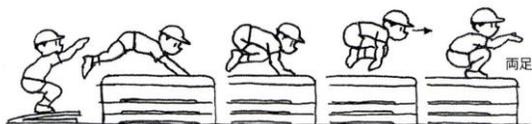


みんなが輝くシリーズ「低学年体育」では「跳び箱運動の技の追求や技術分析の学習は中学年からでよいと思われる」という解説とともに、低学年で大事にしたい4つの運動感覚を紹介している。

- ①助走からの踏み切り
- ②腕支持
- ③着地
- ④肩が前に出る感覚



そして導入の運動として「腕支持跳び乗り」やいろいろな空中姿勢での跳び降りを紹介している。



・手を着いたら顔を上げる
・手を早く突き放して浮く
・手を着いたところより前に着地する

一応、学習指導要領においても以下のように記されている。

「器械運動」は従前「内容の取扱い」で「原則として第4 学年で指導する」としていたが、発達の段階を考慮し、第3 学年から示すこととした。低学年の「器械・器具を使つての運動遊び」の内容は、「固定施設を使った運動遊び」、「マットを使った運動遊び」、「鉄棒を使った運動遊び」及び「跳び箱を使った運動遊び」で構成し、…（以下略）

その会員の方は、学年会議の中で自分の意見をはっきり言うことができなかつたことを大変後悔されていた。そしてしっかり勉強し、発言力をつけることも強く心に刻んでいた。

今回の出来事には大きく二つの問題点を感じる。一つ目は、教材解釈の問題である。今、早期教育は盛んで、幼稚園などでもバンバン跳び箱を跳んでいるところはあるし、地域のスポーツ教室でも、幼少の時からかなり高度な運動を求める傾向もある。そのようなノリで安易に子どもたちに跳び箱を跳ばせようとしていなかったか、また、跳び箱をしっかりと飛ぶための系統的なスモールステップを教師が意識できていたのか、学年の先生たちは自ら問い直す必要があると思う。

二つ目は学校のルール作りである。「〇〇スタンダード」といったことばが日常的に聞かれるようになり、さまざまなルールや規則で縛られることが増えた。よく言えば指導の統一化、共有化は図られるだろう。教師にとってもあれこれ考えたり、悩むことが減るかもしれない。だが、縛りすぎは時として、自由な教育活動を奪い、閉塞感を生み出す。「発表会をしなければならぬ」という固定観念に縛られていなかったか見つめなおしてほしい。

決まっていることを覆すにはエネルギーがいる。エネルギーの源は「自信」。「自信」をつけるには「勉強」と「成功体験」だ。

（文責：辻内）

